

石井方式とは何か

石井方式とは何か。それは、ひと口に言いますと、「社会で一般に漢字を用いて表記している言葉は、常に漢字で表記して提出しなければならない」という基本原則に従って行なう漢字指導、ということになります。

たとえば「学校」という言葉は、社会では、「学校」という漢字でこれを表記していますが、わが国の学校教育では、初めは“かな文字表記”(つまり、戦乱は「ガクカウ」、戦後は「がっこう」という表記)で学習させています。

これはつまり、最初に“にせもの”である幼児向けの特別表記法を与え、それに習熟させた後に、“ほんもの”の「学校」という漢字表記に置き換える、ということです。

この、明治以来ずっと行なわれてきた、文字の学習の仕方を否定したものが“石井方式”である、ということです。

では、なぜ、明治以来の文字学習法を否定するのか。

かなは漢字よりもやさしい、という考え方の誤り。

漢字の読みと書きとを同時に学習させるべきである、という考え方の誤り。

明治以来のこれらの考え方の誤りを改める、ということもその理由の一つであります。最も重要な点は、

「表記の学習は、最初から社会の標準的なものを与えなければいけない」

という考え方にあります。私は、子供たちには、たとえむずかしくても、常に、社会の基準となるものを教えるべきである、それが教育というものだ、と考えております。

言語や文字は、知識として“知っている”というだけでは不十分です。言語や文字というものは、その人の重要な一部分である、と言われておりますが、それほどに、その人の個性を表わすものになって、初めて生きた働きをするのです。

そこまでに至らないうちは、言葉は十分な働きをせず、自分の思想を思うように表現することができません。その意味で、言葉や文字は、“人間の道具”という表現よりも、“人間そのもの”であるという言い方のほうが正しい、と私は思っております。

そういうものだからこそ、東北に育った人は、東北に特有のアクセ

ントを改めようとしても、なかなか改めることができないのでしょう。

ともあれ、言語や文字は、“知識”というよりも、“習慣”にならなければ、その効用を十分に発揮することはできない、ということができましよう。

その“習慣”を作るために、初め“にせもの”を与え、それに慣れさせてから“ほんもの”を与える、という今の文字教育の仕方は、愚の骨頂と言わなければなりません。

一度身についた習慣を改めるには、その習慣を作った期間の二倍の期間と二倍の努力とを要する、と言われていますが、とにかく、ほんのちょっとしたことでも、一度身につけてしまった習慣を改めることの大変なこと、その苦痛なことは、どなたにも経験してご存じのはずで

す。

一年以上にわたって「がっこう」という表記を読まされ、書かされて、それに慣れてしまっている子供たちに、「さあ、『学校』という漢字を教えてやりましたよ。これからは、これを使わなければいけませんよ」と言ったところで、そう簡単に、学習したばかりの新しい表記に移れるものではありません。

だから、「テストすれば書ける漢字が、どうして、作文やノートに使われないのか」と、多くの先生方が不思議がっていますが、これでは使うようになれないのが当たり前というものです。つまり、子供たちは“知識”として漢字を知っているだけで、“習慣”としては、かな表記のほう